

## 博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	趙 英 姫
論 文 題 目	近現代の漢語副用語の機能に関する研究
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、近代以降の日本語における漢語副詞の定着の過程を、文中の機能の分析によってとらえようとするものである。その特徴は、三点に要約できる。第一は、借用語である漢語が日本語の語彙として同化してゆく経過を文法的な機能から緻密に観察したことである。第二は、その対象を狭義の副詞に限定せず、それを含む用言の修飾機能を有する一群の語類すなわち副用語としたことである。そして、第三に、その観察期間を近現代語の形成期とされる明治中期とその完成期と見られる昭和後期とに限定したことが挙げられる。以下では、序章と終章を除く第1章から第5章について、その内容を要約する。</p> <p>「第1章 近現代の漢語副用語の量的概観」では、近代から現代に至る漢語副用語の出現状況を概観している。形成期では、教科書、啓蒙書、小新聞、小説、雑誌から漢語副用語が採集された。また、完成期では、シナリオ、小説、随筆、新聞が用例採集の対象となった。共出現率を調べた結果、それぞれの期のジャンル間の類似性はあまり高くはなかった。採集したデータは1万8千件を超え、副用語の種類は形成期で859、完成期で991、重複を除いた異なり語数は1443であった。考察の対象となるデータ量としては、十分なものである。</p> <p>「第2章 漢語副用語の出現形態の分類と修飾機能の特徴」では、漢語副用語を文中で和語の助辞を伴って出現する際の形態によって分類している。漢語副用語は、文中で伴う助辞、すなわち出現形態によって「ナ型」「ニ型」「ト型」「□型」（前三者以外の助辞に付くもの）「φ型」（助辞を伴わないもの）の5類に分けられる。この出現形態による分類は、提出者の独創性がよく表れているところである。5類の出現比率（異なり数）は、ナ型&gt;φ型&gt;ト型&gt;ニ型&gt;□型の順となっている。これらの型は、文中の修飾機能と密接な関わりを持つ。例えば、いわゆる形容動詞の連用形に相当するナ型の漢語副用語には、〈動作主体の心的態度〉と〈動作の内容面への評価〉といった、抽象的な側面を修飾・限定する特徴がある。ニ型には、事態の〈時間的様相〉を表すものが多く含まれている。ト型の多くは、動作が行われる際のありさまを具体的・感覚的に修飾する様態の副用語である。□型には、述部の否定の要素と共起したり、あるいは話者の主観的な態度を表したりする陳述の副用語が多く含まれる。また、φ型には陳述の副用語が多く含まれるほか、〈程度〉〈量〉を修飾・限定するものが多い。この出現形態による修飾機能の抽出は、やや主観的な傾きもあるが、本研究の基礎となるものである。</p> <p>「第3章 修飾機能による漢語副用語の分類」では、第2章で見た出現形態による特徴が文の重層的な構造とどのような関係にあるかが分析される。文の重層的な構造とは、描写・叙述、判断、提出、表出など、言語主体の事態の把握とその提出のしかたに関わる分類である。漢語副用語がこの重層的構造のどの段階ではたらくかによって、〈事柄の副用語〉〈状況の副用語〉〈陳述の副用語〉の三つに分類される。事柄的な性格のものから陳述的な性格が強くなるにつれてφ型の出現が多くなる。直接述語の用言を修飾する〈事柄の副用語〉には、漢語副用語と述語との修飾関係の緊密さを表す標識として助辞ニ、トを伴った出現形態のものが多いが、直接述語にかからないで事柄全体、または命題全体にかかる〈状況の副用語〉〈陳述の副用語〉には助辞が脱落したφ型が多いのである。例えば、同一の字音語基に複数の出現形態がある「自然（は）」「自然と」「自然に」では、助辞ニ、トを伴う「自然と」「自然に」は〈事柄の副用語〉であり、助辞を伴わない「自然（は）」は前後するAとBの事柄の因果関係を示す〈状況の副用語〉であることが多い。文の構造の重層性は先行研究に基づいているが、それを副用語の分類に適用したところが評価される。</p>	

氏名 趙 英 姫

「第4章 近現代の漢語副用語の変遷」では、形成期と完成期の漢語副用語が出現形態別に比較される。その結果、完成期にナ型が増加する傾向が確認された。近代から現代への漢語副用語の変遷の一つの傾向として、「○○に」のように副用語として用いられ、「○○だ」「○○な(の)」の形で叙述成分や連体修飾成分となるものが多いことが指摘される。この近現代に増加したナ型には〈動作主体の心的態度〉と〈動作の内容面への評価〉を表すものが多い。ナ型は文体的にみれば文章語的で、新聞の文章に著しく、新聞と日常語的な表現の多い随筆との間には有意な差がみられた。また、近現代の漢語副用語の質的な変化の一つとして、「結局」「勿論」など話者の述べ方を表すφ型の漢語副用語の使用の増加現象が指摘できる。また、形成期にはなく完成期に新しくみられる「一的には」という言い方は、これから述べようとする内容を最初に限定することによって、次に展開する叙述内容を予測可能にし、論理関係を明確にする形式であると言える。

「第5章 漢語副用語の文体的性格と推移」では、形成期と完成期の小説で漢語副用語が使われる場面に注目し、会話文にのみ出現するもの、会話文と地の文両方に出現するもの、地の文にのみ出現するものの三つの使用場面に分類・集計し、各出現形態の文体的な性格の傾向を述べている。異なり語数では文章語的なもの（地の文にのみ出現するもの）＞日常語的なもの（両方に出現するもの）＞俗語的なもの（会話文にのみ出現するもの）の順に多い。出現形態別には、φ型は会話文にのみ出現するものと両方に出現するものに占める割合が相対的に多く、ナ型は地の文にのみ出現するものに占める割合が高い傾向がみられた。特に、ト型は約80%のものが地の文にのみ出現し、文章語的なものが多い傾向が顕著である。形成期と完成期の比較では、φ型は形成期には会話文にのみ出現するものと両方に出現するものの割合が相対的に高い傾向がみられたが、完成期には地の文にのみ出現するものの割合が高くなり、変化がみられる。また、ナ型とφ型の割合の差は次第に開く傾向にある。これは文章語的なものの増加を意味するが、一方で会話文に使われる日常語的なものも増えており、近代以降の漢語副用語の増加が日本語の語彙に占める位置を示すものと見られる。

以上の本文に相当する章での考察結果を、冒頭に指摘した本論文の特徴から評価するならば、次のようになる。第一の特徴すなわち借用語としての漢語を文中の出現形態から分析するという目的は、十分に達成されている。出現形態を類型化する手続きにやや無理のあるところもないではないが、漢語副用語全体を一定の方法で分析したことは大いに評価される。第二の副用語全体を分析の対象としたことも、考察の内容に厚みをもたらした。ただし、いわゆる形容動詞の連用形とされるものを含めたところには、もう少し慎重な配慮が望まれる部分もある。第三の特徴である、形成期と完成期のみを考察の対象としたことは、調査の効率を高めたことと、それから外れた期間の変化を推定で行うことのマイナスの両面から評価しなければならないだろう。しかし、全体としての考察結果に大きな影響はないと判断される。

これらを総合するならば、本論文は博士後期課程の研究成果として一定の水準に到達しており、審査委員会としては博士（文学）の称号を授与するに値すると判定するものである。

公開審査会開催日	2009年1月23日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏 名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院 教授		野村 雅昭
審査委員	早稲田大学文学学術院 教授		高梨 信博
審査委員	早稲田大学社会科学総合学術院 教授	博士(文学)早稲田大学	笹原 宏之
審査委員			
審査委員			